

●神戸上映と金素榮監督を囲む会●

11月1日(金) 18:30(93分) 上映後、監督を囲む会  
神戸学生青年センターホール 1000円

# 空色の故郷

●監督 キム・ソヨン(金素榮) ●作品93分 ●2000年制作

◆日本語字幕版 コーディネーター/岸野令子 翻訳/愈澄子 編集/ビデオ工房AKAME

強制移住の生々しい証言、約100年間の歴史的資料映像、シン画伯の絵画、オリジナル・サウンドトラックで構成された35mmフィルム・ドキュメンタリーのDVD化!



「レクイエム」より『別離のキャンドル 赤い墓』

私たちは追放された奴隷と同じでした。  
奴隷には名前も民族ありません。顔もない  
のです。だから、「レクイエム」には顔を描か  
なかったのです。  
シン・スンナム(画家・強制移住当時九歳)

旧ソ連で、沿海州に住むコリアン20万人が中央アジアに強制移住させられた。  
<アジアのピカソ>と呼ばれる画家シン・スンナムが描いた畢竟の  
大作「レクイエム」は、その悲劇を再現する。生存者による表現、  
アーカイブ映像で明らかにされた歴史の貴重なドキュメンタリー。  
観客は、3×44メートルの知られざる傑作「レクイエム」に圧倒されるだろう。

- 2000 釜山国際映画祭 ウンパ賞
- 2000 ソウル国際ドキュメンタリー映画祭 大賞
- 2001 山形国際ドキュメンタリー映画祭 スペシャルメンション賞
- 2001 ニューヨーク・アジア・アメリカン国際映画賞
- 2001 フランス国際オーディオ・ビジュアル映画祭
- 2002 台湾国際ドキュメンタリー映画祭 NETPAC賞



シン・スンナム画伯  
1928~2006



感動のドキュメンタリー映画

# 空色の故郷

SKY-BLUE HOMETOWN

強制移住 ウラジオストクからウズベキスタンへ



◆「貨物列車に詰め込まれ何日も旅をしました。途中で止まっている時、車輪に轆かれて死ぬ人もいました」

ーラ・ヴラジーミル (強制移住当時4歳)

◆「父母は結局故郷に帰れなかったので、私が韓国に留学した時、祖国の土を持って帰り父母の墓にかぶせました」

ーパク・ガリーナ (強制移住2世)

<監督 キム・ソヨン(金素榮)よりメッセージ>

この映画はソウルでの上映以降、13年ぶりに日本語字幕版が作られ、日本の観客との出会いを迎えている。

シン画伯は、生前、広島の実験犠牲者の為の別の「レクイエム」を制作し、その展示会を日本で開催することを望んでいた。

惜しくも、彼の夢は叶えられなかったが、今回の上映会は、フィルムを通して彼の代表作に接するよい機会だと思う。

数十年前の事件をまるで昨日の事のように生々しく、そして、最後になるかもしれない証言を語ってくれたウズベキスタンに強制移住された

コリアン1世のシワの寄った顔が、未だ鮮やかに頭の中に残っている。

フィルムの中に刻まれた彼らの生と、シン画伯の静かな告白に耳を傾けて頂けたら幸いだと思う。

<映画のストーリー>

1937年、スターリンの命令でウラジオストクや沿海州に住んでいた朝鮮族の人たち約20万人が、強制的に中央アジアに移住させられた。現在でも、ウズベキスタンには、このコリアン1世とその子孫が多数生活している。

シン・スンナムは、9才で家族と一緒にここに移住させられ、美術学校を卒業してタシケントの大学で美術を教えながら、様々な作品を描いていた。

映画は、シン画伯を中心に、タシケントで今も生活を営む移住者たちの様子を伝えている。突如汽車に乗せられて全く知らない土地に連れてこられた幼い日のこと、KGB(ソ連国家保安委員会)にスパイ容疑で連行されたまま帰ってこなくなった父のこと、第二次大戦で労役につき、次々に死んでいった男性たちのことなど苦難の歴史が淡々と綴られている。

こうして死んでいった「高麗人」(彼らは自分達をそう呼ぶ)の霊に捧げるため、KGBの目に触れないようにしながら、30年間描きつづけられたのが、シン画伯の大作「レクイエム」だ。



\*\*\*\*\*

## ●神戸上映と金素榮監督を囲む会●

日時：2013年11月1日(金) 上映18:30(93分) 上映後、監督を囲む会

会場：神戸学生青年センターホール 参加費：1000円

※神戸学生青年センターでは、カザフスタン在住のゲルマン・キム博士との交流から2010年(4.30~5.8)、「中央アジアのコリアンを訪ねる旅」を実施しました。ウズベキスタン、カザフスタンに中央アジアコリアンの足跡を訪ねました。キム博士ご夫妻が案内してくださいました。神戸大学にも留学された金素榮監督をお招きして、上映会と監督を囲む会を開きます。ふるってご参加ください。(飛田雄一「中央アジアのコリアンを訪ねる旅—ウズベキスタン、カザフスタン—」、『むくげ通信』240号、2010.5参照)